**十字架の必然性 2017年4月14日**

**マタイ21:1-11, マタイ26-27 スティンストラ牧師**

**それは山道を気をつけて下ってきたハイカーの登山シューズにちょっと蹴飛ばされた小石から起こってしまう。その小石はそれ自身はちっぽけなものだが、重力の法則にしたがって、がけっぷちに向かう急な坂を転げおち、やがて大きな勢いを伴い、不安定な他の石に衝突し、その石は次にさらに大きな岩に向かって跳ね、その岩をも動かす。その岩はさらに一つの直径数メートルもある大きな石に向かって飛んでいき、その大きな石は高い崖の上におさまっていたのに、その石をその場から動かし、大きな土砂崩れを起こしてしまう。　そのような破壊的な事が起こる機序は、何事もそのスピードを遅くすることはできず、ましてや制止することもできず、ただそれらの機序が次から次へと容赦なく結果に向かって進んでいってしまう。**

**私はいまだこの金曜日を「グッド」と呼ぶには難しいものを感じるキリスト教会の暦の中に起こったストーリに、今私が話したような状況と似たような必然性があるように思える。　聖なる都への行進が枝の主日に始まると、それはもうイエスの十字架刑は避けようがないことがあきらかなのだ。迫りくる破局を一見避けることができそうな機会があるかのように見えるが、隠れておられる主に向かってあるいは土砂崩れの速さの中にまきこまれてしまっている弟子たちに向かってなんら行動がとられない。**

**この話の過程において小石になっているのは、イエスが苦しみを受け死ぬためにエルサレムの市街に入っていくのに乗る動物を引いてくるように二人の弟子に依頼したこと。イエスはもしだれかがロバがつながっているひもをほどいて連れていこうとしている時、何のために必要なのかと聞く者がいたら、ただ「主が必要なのです。」と答えるように指示している。　そしてなぜかその不完全な返答でも事は前に進んでいく。　だれも家畜泥棒だと言って弟子たちを逮捕することもない。「ほら、私のロバから、お前らの汚い手を離せ！」などというものもいない。十字架へのパレードは始まる前に阻止できる可能性だってあったのかもしれないが、実際はロバを引いてくることになんら問題も起こらなかった。奇妙なイエスの使命が止まってしまうことはなく、悲劇の車輪は回りはじめる。**

**その時点からすべての登場人物たちは、まるで荒々しい水かさの増した川の死の流れにとらわれてしまったかのようだ。　だれもが、情け容赦のない流れにまかせて進んで行く。あのイエスが十字架に釘付けにされてしまうことになんらストップがかからない。イエスの友人たちは彼が政治的な対立を防げるように援助することに失敗した。援助するどころか、助けようとすることは必要ないとし、そうすることでユダヤの政治的なリーダから抑制されずに動けるようになると考え、ただイエスが宗教上の罪の告発・非難を徐々に増加させていき、さらに宗教上の指導者たちが誇りに思っていた神殿の崩壊を預言してしまうことを、ただ見守るだけであった。イエスの確固たるふるまいは、彼に対してもっとも凶暴な敵対者たちの決意をますますかたくななものにしてしまうどころか、彼に対して強く同情していた人々すらも、もしイエスがそのふるまいを続けてしまえば、もうだれかが傷つくことに結びつくしかないと考えるようになってしまった。**

**そして次にはイエスに対する致命的な企てが生まれて、すぐにユダにイエスをうらぎる機会をもたらすことになる。 その企ては主の逮捕と、イエスのもっとも身近な友人たちに彼自身を放棄してしまうという結果をもたらすことになる。その友人たちの一人は、公衆の面前でイエスのことをいっさい聞いたことが無いとまで否定してしまう。このようになってしまうと、イエスが受けている裁判の流れを制止できるものはだれもいないし、イエスが祭司長やローマの高官から順番に質問を受けている間に、イエスを非難する人々から打ちひしがれ、ののしられてしまっているイエスのために立ち上がろうとする人も一人といない。死罪の判決はあっという間に出されてしまい、そして十字架刑が行われる場へとつれていかれる。あまりにも事はすばやく進んでしまい、そこに登場している人々には、「ああこうすればよいのに。」などと考える機会は無かった。彼がエルサレムに入っていく決断をした瞬間から、死への運命は決まっていた。**

**イエスの死に関する受難週の 記述について、その必然性を否定することは不可能だ。その痛々しい場面には、最初から最後までの状況変化の中に明らかで確かな論理が存在している。　しかしもっと重要なのは、グッドフライデーのグッドニュースは十字架そのものにだれも止めることができない力があることだ。記述そのものからわかるように次々と起こった恐ろしい出来事の結果として神の子の命が取り去られてしまうが、それと同時にすべての出来事の中で、すべての人々にとって主が一貫して重要だったということは間違いないことだ。　何一つとして、私たちの救いのための神の計画に沿っていないことはない。全能なる聖なる御手こそが十字架刑を引き起こす究極的な原因である。その十字架は、私たちが神の救いの中にいるという栄光に気づかされる事につながっている。そしてその栄光は、イエスが天の父から与えられた使命にいとわずに最後まで従う結果である。はりつけの地、カルバリー、へ向かっていくことを何も防ぐことができない本当の理由は、単にイエスが神の無条件な愛を確信しているからであり、絶えない恵みは私たち人類が罪深くとんでもない営みをしている時にも止まらないのである。**

**私たち自身の過ちから私たちを神が救ってくださる力は、私たちが自分たちでなんとかしようとする力よりはるかに強いということがわかる。我々が神に力の限り激怒し、神の目的を妨害しようとしても、神の救いの力が止まってしまうことはない。みなさんが土砂崩れが起こってしまっていると感じる中でも、主の憐れみは必ず勝つ。なぜならイエスがあの十字架を担いで「されこうべの地」へと歩んでくださっていたから。イエスは、自分ではコントロールができないような状況になってしまったからしょうがなくて十字架を担いで歩まれたのではない。みなさんも私も、死の支配から解かれるには他に方法が無かったからだ。イエスの慈しみ深い愛は、今日があるための必然である。　　アーメン**